

## 鎌倉古道

なごやの

をさがす

【5】

## 古渡から熱田を越えて…宮を過ぎる道

## 1 「よきぬみちなれば…」

鎌倉時代にも熱田の宮の名声は全国にわたっており、鎌倉街道を旅する人はほとんどが宮を参拝したようです。鎌倉時代の紀行文の中でも、前に紹介した『海道記』、『東関紀行』など、みな熱田に寄ったことを記しています。

しかし、鎌倉街道が熱田を通過していたかどうかとなると今ひとつ定かではありません。そのことを微妙に示しているのは、1277年に書かれた阿仏尼の『十六夜日記』です。そこでは、「よ(避)きぬみちなれば あつたのみやへまいりて…」とあります。これを、①避けることができないので…ととるか、②通り過ぎるわけにもいかないので…ととるかです。即ち、①なら街道は宮を通過することになり、②なら街道は通り過ぎることの出来る位置にある…ということになります。(文献①)

露橋から東に熱田台地に取り付いた鎌倉街道を追う旅は、ここ古渡で東と南の大きく二つの方向に分かれることとなります。今回はこのうち南の熱田への道について考えてみたいと思います。

## 2 古渡と熱田

## (1) 古渡というところ

名古屋の地形図を見ると、その中央に南

北にかけて象の鼻のように延びた台地が目につきます。これが南では熱田台地と呼ばれる台地です(図1)。古渡はその中ほどにあり、名の起りは東側の台地の下に古くは海が残って渡りがあったからだといえます。古渡は古代東海道の通過地ともされ、前回紹介した露橋からの直線道路もここを通過しています。中世の鎌倉街道もこれまでの経路からみて、ここ古渡を通過していたといえるでしょう。

## (2) 熱田の宮への道

熱田台地の南の先端は熱田の宮です。熱田は中世においても、源頼朝が生まれ、足利祖

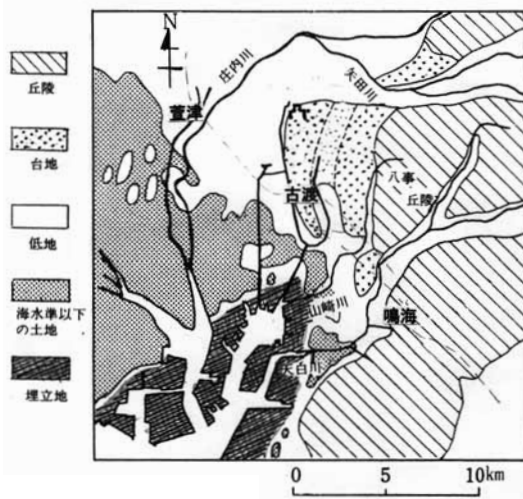


図1 名古屋の地形。古渡は象の鼻の中ほどに位置する

家ともつながった有力な地域でした。このため熱田の宮を通る人は何人もの将軍を始めとして多くの記録があります。

ところが古渡から熱田への街道がどこを通っていたかとなると、中世の紀行文等にもふれられていません。候補となるのは台地のほぼ中央を進む江戸時代的美濃路(今の国道19号)か、台地の東側を廻る今の大津通付近の道でしょう。後者は経路沿いに古代からの史跡が多く、金山から南には旧道も残っています。(図2)

### (3) 熱田社を越えて

街道から熱田の宮に入るのは、北門は古くから閉ざされていたために西門か東門でしょう。問題は本殿で参拝した後どちらに出たかになります。東には昔は「春敲門」がありました。その付近を東に出ると、かなり後まで海水が入り込んでいたという低地です。しかしここには平安時代に田島氏が埋め立てをして屋敷を築いた所があったとされ、その先で海が川を渡って対岸の御器所台地の大喜付近に

取り付くことができます。

南に出ると、これは後の東海道ルートにつながるでしょう。江戸時代の伝馬町は、それ以前は東側が今町、西側が宿町といわれていたようです。今町は新しくできた町でその先は築出という埋立地でした。残っていたとされる海面も、戦国時代には川になっており、裁断橋が架けられています。行く先は、東に進めば御器所台地の先端井戸田付近になり、東南の東海道ルートなら笠寺台地の山崎付近になります。

### (4) 鎌倉街道のルート

以上からは、古渡から熱田を越える街道のルートを1本には絞れませんでした。ここでは、古渡から宮へは台地の中央と東側の2つのルートを、宮から先の低地の横断も東口の東行と南口の東行、東南行ききの3本のルートを考えておきたいと思います。

## 3 鎌倉街道を探す

それでは鎌倉街道の跡を追って熱田への道を歩きましょう。地下鉄の東別院駅を降り4番出口を出ます。すぐに交差する幹線道路(大津通)付近は前述した台地の東側の道の曲がり角にあたります。信号を渡り西に歩くと右に東別院の大きな建物が見えます。ここは戦国時代に織田信秀が古渡城を築いた所で、境内左側に城跡の石碑があります。西に進んで国道を渡ります。この広い道路の中に江戸時代的美濃路があり、中世にも台地の中央部に行く熱田への道があったかもしれません。交差点の西南を西にすぐのところは古渡稲荷があります。脇にある山王社が有名で山王稲荷ともいわれ、江戸時代にはこの稲荷と今は道路の中に消えた犬御堂との間の道が鎌倉街道とされています(図3)。

稲荷社の1本西の道を南に入り、次の信号を右に行くと閻森八幡社があります。保元の乱に敗れ伊豆に流された弓の名人源為朝の創建とされる社で、本殿西に為朝の鎧塚があり

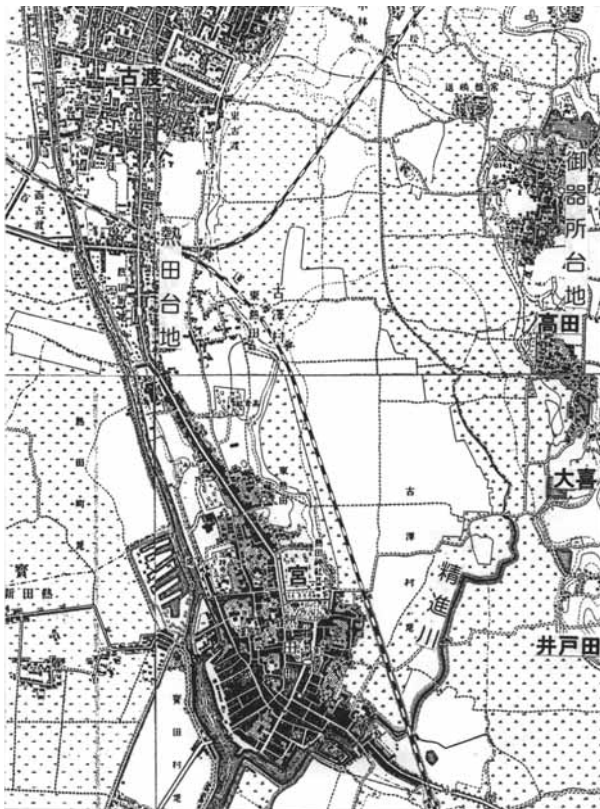


図2 古渡から宮へ。中央的美濃路の右に細い旧道も見える



▲「金山」の名のもとになった金山神社

◀古渡稲荷。右奥に山王社が

ます。先ほどの信号に戻り南に進みます。少し行くと掘割になった JR 線と名鉄線を越えます。越えてから次の道を右に入るとすぐ右側に元興寺があります。現在の寺は後に興されたものですが、7 世紀からこの一帯に元興寺という奈良の願興寺の系列の大きな寺がありました。一時期、国分寺を代替したという、市域内でも最も古い寺の一つです。

南に行くとバス道路があり、左に曲って国道に出ます。国道には、その交差点の西南角に佐屋路の道標がありますが、次の新尾頭の交差点を越えた所には早くも熱田神宮一の鳥居跡の碑があります。中世のことはよく分か

りませんが、宮は当時も大きな範囲を保っていたのではないのでしょうか。

台地の東側の道跡を迎えるためにその信号を東に行きます。少し行くと北側奥に金山神社があります。宮の鍛冶師がまつた社とされ、この神社の名が今日の名古屋の副都心・金山の名前になりました。すぐの信号を渡り東に 1 本目を右に曲ります。この道は大津通と別れて宮に向かう旧道です。道に沿って、今は無くなりましたが、点々と古墳がありました。1\*。ほど行くと左手に高蔵公園があります。この付近は貝塚や古墳群があった所で、公園の南の一角には高座結御子神社があり、宮と並んで古い社で尾張氏の祖神をまつります。

神社を出て先ほどの旧道の延長上を進むと国道に出ます。台地の狭い所で中央の道と東側の道が合流しました。少し後ろの横断歩道橋を渡ると道の向こうに断夫山古墳が広がります。この古墳は名古屋地方では最大の前方後円墳で、全長150m、高さは16m強あります。名は夫を断ったという宮簀姫をまつることからのようです。公園に入り古墳の西側を回ってその南西に出ます。そこから白鳥古墳へは南に200m程で、ここも公園になっています。白鳥古墳は



閻森八幡社の横の源為朝の鎧塚



図3 古渡稲荷。右手前の犬見(御)堂との間に「小栗(鎌倉)街道」とある (○印、尾張名所図絵)



尾張氏の祖をまつる高座結御子神社

歩道橋からみた  
当地方最大の断夫山古墳



古くから日本武尊の墓とされていたようで、古墳の東側の法持寺は9世紀に空海が武尊を慕って地蔵像をまつたのに始まるとされています。15世紀に曹洞宗で再興され、大宮司の菩提所になりました。

寺の前の道を東に行き国道に出ます。南に交差点を渡り少し行った右手に古い門が残された寺があります。誓願寺で、古くはここに宮の大宮司の別邸があり、源頼朝の出生地とされる所です。中に進むと産湯の井戸があります。

南に歩道橋を渡り、西門から神宮に入ります。熱田神宮は宮簀姫が草薙剣をまつたのに始まるとされる神社ですが、その形態は長い歴史の中で幾多の変遷があったようです。中世の頃の形は残りませんが、信長が桶狭間の戦勝で奉納した信長塀が残り、おおよその姿をイメージできます。



日本武尊の墓とされていた白鳥古墳

源頼朝の出生地とされる  
誓願寺の産湯井戸



熱田神宮。昔、南門のあった付近。右に信長塀

前節で考えた出口の1つ、昔の東門の位置は神宮会館の中で、その参道は現在の東門の少し北、名鉄の踏み切りの位置になります。もう一つの南門は今の信長塀の東の切れ目で、その参道は宝物館の前面を通り、現在の正門への参道の東側に残る道です。ここから先は昔の面影はありませんが、当時は少し屈曲して後の東海道筋に出たと考えられます。その先の御器所台地への道は今の国道1号付近かその北辺りを進んだのではないのでしょうか。今では想像もできない国道1号をながめて地下鉄の伝馬町駅を下ります。

#### 4 年魚市潟から精進川へ

熱田台地と御器所台地の間は古くは海が入り、年魚市潟と呼ばれた所の一つの湾奥でした。古代の何時頃かは分かりませんが徐々に陸地化して、江戸時代の初めには今の国道1号線の辺りまで陸地になりました。そして水路は精進川と呼ばれる、今の新堀川の前身になりました。鎌倉街道の探索が難しいのはちょうどこの遷移する時期に係るからです。

この問題は次回にもう少し考えたいと思いますが、端的に言えば完全に陸地化していれば古渡からは熱田の宮を経由する道が選ばれたのではないのでしょうか。難しいのはその中間の、海面の干満と水田化とのからみがある場合です。その場合には、その度合いによっていくつかの選択肢があり、今回想定したような複数の道があったのではないのでしょうか。

〈主な参考文献〉

- ①市史編集委員会『新修名古屋市史第2巻』(1998、名古屋市)
- ②第3回文化史展『熱田神宮と中世』(1972、熱田神宮宮庁)
- ③熱田研究よもぎの会『史跡 熱田』(1962、泰文堂)
- ④榊原邦彦『熱田鳴海の鎌倉街道』  
(所収：『熱田風土記 巻7』、1973、久知会)